

城北公園

治水改修～公園へ

明治18年(1885)淀川左岸の洪水は、生駒山の麓まで押し寄せ、大被害をもたらした。その後も度重なる被害に淀川の改修計画が始まり、機械力も今ほどではなかった河川堤防工事は困難を極めたが、工事期間は延長されつつ明治43年(1910)に竣工した。

明治の大改修により、守口市役所から太子橋一帯・中宮一部・生江一部辺りの昔の淀川河川敷地域は、堤防の外に取り残され、旭区部分の大小水溜りや水面の多い空地が城北公園になった。その後、小支流の江野川を利用して、園内に植えられたのが花菖蒲である。

今や市内一番の菖蒲園となり、城北公園には欠かせない公園の見所となった。

園内の大池は淀川本流とともに、釣り人にも人気の



写真■城北公園正面

スポットとなっている。

改良工事のときにできた公園下川岸のワンドは、淡水魚の宝庫だったが、近年は外来の魚や草が多くなり、淀川の自然を守る環境保護とエコの声が高まっている。



図■昭和9年(1934)頃の淀川

資料提供：大阪市史編纂所



図■城北公園とワンド

資料：保育社「淀川絵巻」より

2つの斜張橋

旭区の大自慢の淀川は、豊かに流れ、旭区流域に菅原城北大橋と豊里大橋の美しい斜張橋が2橋あります（市内に斜張橋は全6橋）。

市内交通に役立ち、遠景・近景ともに朝夕、すばらしい景観です。



写真■菅原城北大橋



写真■豊里大橋

城北公園のはじまり

昭和3年(1928)

豊里公園（当時、東成区）として大阪都市計画により、面積約13.23ヘクタール（甲子園の約9倍）と議会決定。

昭和8年(1933)

第14回失業応急事業として起工、10月より淀川河川敷とともに整備された。当時の面積約9.52ヘクタールで園地の約3分の1は池。現在は約10.3ヘクタール。

昭和9年(1934)

大阪城の北方位置により、城北公園（旭区）と改称し、開園。



写真■榎並小学校の遠足

城北公園北側の河川敷（昭和11年頃）～城北公園では、榎並小学校の遠足や城北小学校の運動会（2,500人位）が行われた。

- 当時市内で、明治24年(1891)開園の中之島公園、明治35年(1902)の第五回勸業博覧会跡地に明治42年(1909)開園の天王寺公園、昭和6年(1931)開園の大阪城公園に次ぐ大公園であった。
- 天王寺公園から移設の教材植物園、学校教材園、工業用植物園（の葉草園）などで始まる。温室、児童遊技場、ボート舟遊びの池、魚つり用の流れの娯楽施設があった。また、貸し農園70区画（1区画約52平方メートル）がヨーロッパ大都市の例になり、市民の健康増進の目的と園芸趣味の普及のために設けられていた（時代の先取りをした行政がすでにあった）。

昭和10年(1935)頃

城北公園昆虫館が公園に建てられたが、戦況の悪化にともない、戦時中は閉鎖。収蔵標本は、昭和48年(1973)に自然史博物館に移管された。



写真■昆虫館内部

写真提供：(財)大阪市都市工学情報センター



写真■昆虫館外観

写真提供：(財)大阪市都市工学情報センター

市民の人気を集め、「城北公園昆虫の会」「昆虫と植物の会」などが活動し、数多くの昆虫専門家が育ったという。

昭和23年(1948)

国の戦災復興都市計画により戦後整備が始まる。

昭和27年(1952)

池を少し狭めて、運動場が設けられる。

昭和28年(1953)

開園時の池を利用した菖蒲園計画が始まる。花菖蒲は、淀川の隣接土地に合う水生植物として選ばれた。（国の大公園整備を含む第1次5ヵ年計画）

昭和36年(1961)

第二室戸台風被害の復旧工事と共に、造成工事が進められる。砂質土壌のため通水性は良いが水持ちが悪く、粘土や畑土が入れられ、砂質土は長居公園の粘土質土と交換されて相乗効果をあげた。

昭和37年(1962)10月

花菖蒲の定植が始まる。
● 名古屋市の鶴舞公園や明治神宮の菖蒲園から株分けを受け、品種や株数が集められた。

昭和39年(1964)
5月20日

市内初の菖蒲園が開園する。（当時8,000株）
● 都市公園整備を重点に、大阪市緑化100年宣言により、緑地を市民一人あたり約1平方メートルから2平方メートルへ。